≪論　　文≫

ホラーティウス「ブルンディシウム旅日記」(*Sat.* 1・5) に関する試論

松　田　治

I はじめに

古来ホラーティウス（以下 Hor. と略記）の諷刺詩の中で特に親しまれてきた作品が二つある。1・5と1・9である。後者は邦語で「売込み」という題が付けられるとおり[1]，何とか自分をマエケーナース（以下 Maec. と略記）に売込んで出世したいと願う男が Hor. にまつわって癖易させるという内容である。この内容は我々の考える諷刺詩という枠にぴったり合っている。ところが1・5の方は少し違う。かなりの程度の悪意ないし敵意を込めて言及される人物がいない。ここに，諷刺詩という枠の中に収められているこの作品の特徴がある。ともかく一読して暢気な旅行記なのである。

この作品は訳文[2]などを読めばそれなりに理解できる，諷刺詩集中でも最も平易な作品の一つであろう。それでも古典ゆえの難しさを免れることはできないわけで，そのような点をできるだけ少なくできればというのが小論を試みる者の願いである。

この作品を論じるに当っては，特に次の二つの問題を取り上げなくてはならないと思う。先ずこれはローマ諷刺詩の先輩ルーキーリウス[3]（以下 Luc. と略記）の作品を模倣した所産なのかどうか。次に，この穏やかな諷刺詩をHor. はどのような意図で作ったか，ということである。これらのことを考える過程で当時の Hor. の状況がおのずと明らかになるものと思う。以上に加えて，この旅がどのようにしてなされたか，その交通手段の問題なども考えてみたい。当時の一般的な旅行のあり方の一端をうかがうことができよう。

先ずこのブルンディシウムへの旅行のあらましを述べよう。

発端はスマート，軽快である。最初に旅行の目的を語るなどの野暮ったさは一切ない。詩人はいきなり旅だつ。弁論術教師ヘーリオドーロスを道連れに Hor. はローマを発ち，アリーキア[4]に泊る。ここからフォルム・アッピー[5]に行き，悪い水に当って腹痛に悩まされる。ここで運河を行く船に乗り，船上で一泊。但し，蚊や鳴き騒ぐ蛙，そして酔った旅人と船頭の歌声などで，よく眠れない夜となった。3日目の午前10時頃に運河の終点に着き，食事など済ませてからタッラキーナ[6]へ行って宿泊。ここで

1) 高津春繁訳（『世界人生論全集』2，筑摩書房，昭和38年，411頁）．他に「あつかましい男」とも（鈴木一郎訳，『ローマ文学集』，筑摩書房，1966年，163頁）．

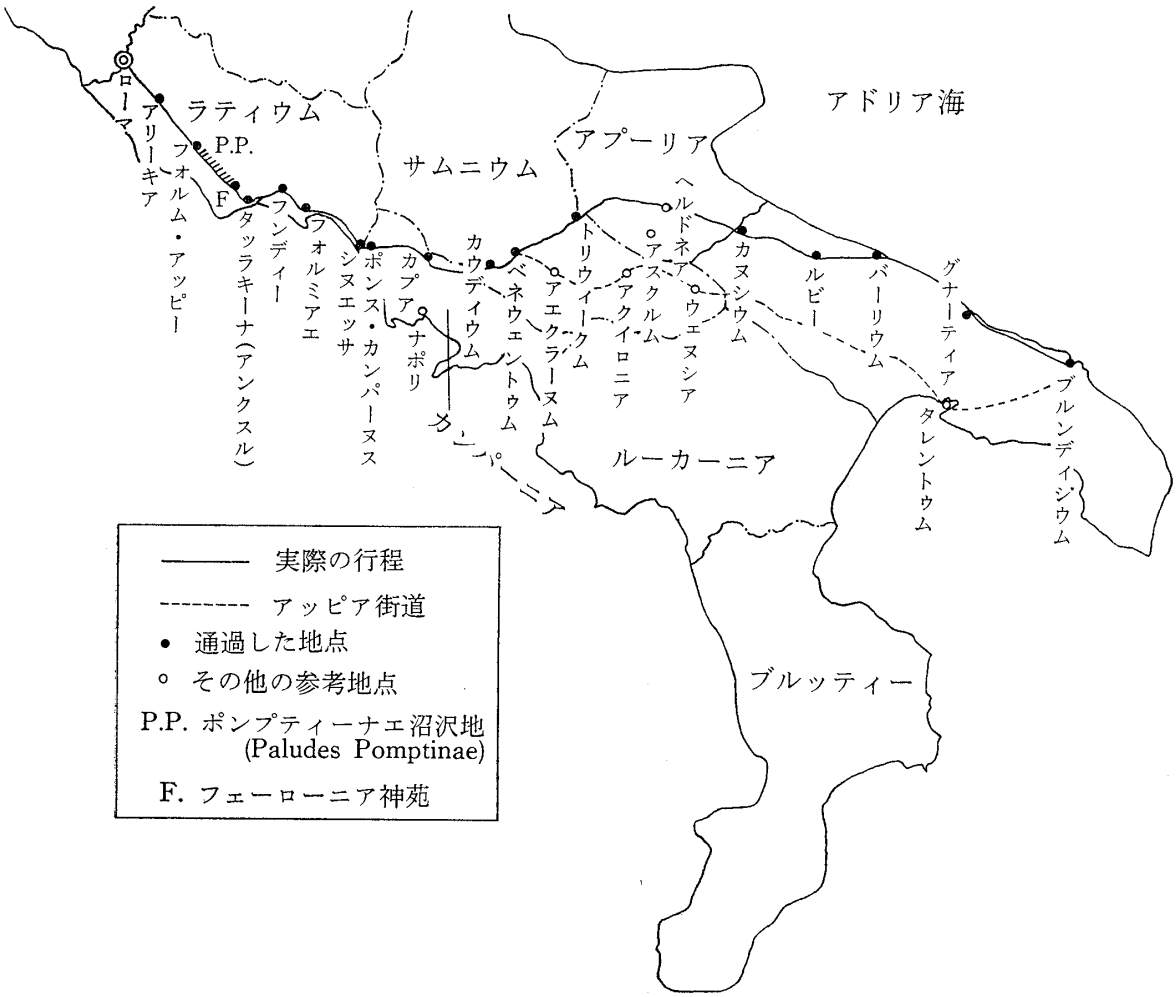
2) 邦訳では注1に挙げた訳文の他に拙訳（『流通経済大学論集』Vol. 17, No. 2, 1982年11月，pp. 55-58）を参照されたい．

3) C. Lucilius (ca. 180-102/01). ラティウムとカンパーニアの境に近い Suessa Aurunca の騎士身分の家に生まれる．ローマの貴族小スキピオーの友人．ローマ諷刺詩の生みの親と仰がれ，30巻の saturae をものしたが，今は若干の断片が残存するのみ．Hor. は彼の文体や詩作法などを批判するが，ローマの文学者らがこれだけはローマのものと誇ったこのジャンルの創始者としての名誉を称えるのにやぶさかではない．

4) Aricia (現 Ariccia). アルバ山塊の麓の町で，すぐ近くにはディアーナ神殿を包む森の影を映して美事なネミ湖がある．

5) Forum Appi. 前300年頃監察官 Appius Claudius Caecus がアッピア街道沿いにローマの植民地として建設した町．ポンプティーナエ沼沢地の入口で，ここからタッラキーナまでは運河を通って夜間も旅を続けた．使徒パウロもアレクサンドレイアからローマへの途次ここを通った．

6) Tarracina. 原文では Anxur で，これはウォルスキー方言による名称．テュレニア海側の海辺の町．



ブルンディシウム行概略図

政治家 Maec. およびコッケーイウス[7]と合流し，かくしてこの旅行の目的がさりげなく暗示される。

4日目，フンディー[8]では正装した町長にもてなされ，更に足を伸ばして海辺の別荘地フォルミアエ[9]で一泊する。ここではやはり政治家のムーレーナとフォンテーイウス・カピトー[10]が分担してもてなしてくれた。

5日目，シヌエッサ[11]で，旅に参加するためナポリからやって来た友人たち——プローティウス・トゥッカ，ウァリウスおよびウェルギリウス——と再会し，詩人はそのときの嬉しさを熱狂的な表現で述べている。ここからカンパーニア橋[12]へ足を伸ばして宿泊。

第6日はカプア[13]に泊る。日中に到着したので Maec. はいつものように球戯を楽しみに外出するが，Hor. は目の具合が悪く，ウェルギリウスは胃の調子がおかしいので二人して宿に

7) L. Cocceius Nerva. 前39年代理執政官. 40年, Octavianus と Antonius 両陣営間でブルンディシウム協定が成立したとき, Maec., Asinius Pollio と共に活躍した.

8) Fundi (現 Fondi).

9) Formiae (原文では「マームッラー族の町」), テュレニア海沿岸の町で当時の有名な別荘地の一つ.

10) Murena は後に Maec. の義兄弟となった L. Licinius Murena のこと. Fonteius Capito は Antonius の代理人, 前33年代理執政官.

11) Sinuessa, カンパーニアとの境界に近いラティウムの海沿いの町. Plotius Tucca, Varius, Vergilius はいずれも当時の代表的な詩人たち.

12) Pons Campanus はラティウムとカンパーニアの境界近くを流れる Savo 川にかかる橋.

13) Capua, カンパーニア地方の首都. ここから南下すると海沿いにナポリ (ネアーポリス) がある.

残る。

7日目はカウディウム[14]で前述したコッケーイウスの別荘に入る。晩餐の余興に二人の道化師[15]が食堂に招じ入れられ，その掛け合い漫才風のやりとりを楽しみながら食事が続く。どうということもない二人の舌戦がかなりの分量で再録されている点が注意を引く。

サルメントゥスという男は元奴隷で，Maec. によって自由を与えられ，今度の旅行では従者の一人として同道している。このような座興に備えて同行を許されたらしい。これと対戦するメッシウス・キキッルスは地元のオスク系の人間である。文面からはひどく醜怪な容貌をしていたことが判る。二人は互いに身分上の弱み，肉体的欠点を攻め合う。この漫才は，はるばるやって来た一同には恰好の娯楽になったようだが[16]，我々にとってはさして面白くもない。

翌日（8日目），一同はベネウェントゥム[17]へ。宿の亭主が熱心に料理したのはいいが，熱意が過ぎてボヤ騒ぎを起こした。9日目，詩人はいよいよ懐しいアプーリア[18]の風景と再会を果たす。この日の宿泊地はトリウィークムで，ここから詩人の生地ウェヌシア（Venusia，現 Venosa）は指呼の間にある。ここで Hor. は宿の若い女中とデートの約束を交したが見事に袖にされた。彼は率直すぎるほどの表現でその折の落胆ぶりを記している。

10日目，トリウィークムから約24マイル離れた小さな町で宿泊。町の名が六脚韻（ヘクサメトロス）にうまく合わないので，Hor. はその名を書くことができない[19]。町の特徴は，極端に水が悪く（飲料水はよそから持ってきたものを買わねばならない），逆にパンは上等ということである。

翌11日目に泊ったカヌシウム[20]は，水が少なく，かつてトロヤ戦争で活躍した英雄ディオメーデースが建設したとの伝説を持つ町である。ここでウァリウスが一行と別れた。

12日目の宿泊地はルビーで，アドリア海沿岸はすぐ近い。次の宿泊地（第13日目）バーリウム[21]は海沿いにあり，魚の多い（piscosi）町と記されている。

14日目はグナーティア[22]で泊った。ここでは町の人々の迷信が一行の笑いぐさになった。この迷信を信じる，信じないということに関連して，Hor. はエピクーロス哲学の知識の一端を披露している。そして15日目，ブルンディシウム[23]に到着し，旅行が終る。そのあと，Maec. 以下の政治家グループはどうしたとか，Hor. ら詩人グループはどうしたといった蛇足は一切ない。発端と同様にあっさり終っている。

II ローマ人の旅行熱

古代イタリアには，ローマが覇を唱える以前から既に特にエトルーリア人やギリシャ人の作った道路があった。しかし何といってもイタリアの道路はローマ人の建設したものにとどめを刺す。政治の中心地は道路網の中心地でもあった。道路網の発達は，ローマ人によるイタリア半島の征服，政治統一および経済開発の動きと軌を一にした。多くの場合，道路建設者は執政官や属州総督で，道路は彼らの名で呼ばれた[24]。

14) Caudium，サムニウムの町．古くからのアッピア街道の宿場町で，近くには，前321年第二次サムニウム戦争におけるローマ軍の壊滅で知られるカウディウムの隘路（furculae Caudinae）がある．

15) Sarmentus, Messius Cicirrus の二人．

16) 「私たちはすっかりワクワクしてこの夕食にたっぷり時間をかけたものだ」(prorsus iucunde cenam producimus illam, 7).

17) Beneventum，サムニウム南部の交通の要衝にある町．一行はここでアッピア街道を離れて別の道に入る．

18) Apulia はアドリア海に面した地方．詩人の故郷 Venusia（現 Venosa）はこの近く．小村 Trivicum（現 Trevico）はまだサムニウム域内．

19) 昔からこの町は Asculum Apulum, Herdonea などではないかと推測されてきたが定説は求めがたい．

20) Canusium（現 Canosa），アウフィドゥス川右岸にあるアプーリアの町．

21) Rubi（現 Ruvo), Barium（現 Bari), 共にアプーリアの町．Barium からあと一行はアドリア海沿いに南下する．

22) Gnatia（現 Torre d'Egnazia），カラブリアとの境に近いアプーリアの町．バーリウムとブルンディシウムのおよそ中間．

23) Brundisium（現 Brindisi）．カラブリア地方の主要な港町で，Tarentum を経て延長されたアッピア街道の終点．エーペイロスやギリシャなどへ行く船の出発点．

24) R. Chevallier, *Les voies romaines*, Armand Colin, 1972, p. 150.

たとえばアッピア街道（Via Appia）は監察官 Appius が建設したものである。

ローマ時代の幹線道路の中でも代表的なのはこのアッピア街道であり，今日でも我々は古代ローマ人が敷いた舗石を踏むことができる。この道路はローマが南部の沃地カンパーニアに食指を動かした所産である。ローマと南部を結ぶこの最初の大連絡路は，前 312 年監察官 Appius Claudius Caecus が作った。初めはカプアが終点だったが，やがてベネウェントゥム，サムニウムの町アエクラーヌム，ウェヌシア，タレントゥムを経てブルンディシウムまで延長された（前 264 年）。政治力と経済力の発展が必然的に道路の延長を促した典型的な例である。

アッピア街道は幹線道路であるゆえに，新しい別方向の道路の母ともなった。たとえば，Chevallier によると[25]，トラーヤーヌス帝はベネウェントゥムを基点としてカヌシウム，グナーティアそしてブルンディシウムに達する道路（Via Traiana）を作った（112-117 年）。Hor. の一行が通ったのは正にこの道と同方向であり，トラーヤーヌスが新道を作ったというのは，あるいは旧来のものを改装補強したのであろうか。これも紀元後のこと（95 年）であるが，シヌエッサからは海辺の湿地帯を通ってクーマエ，プテオリ，ナポリへ行く Via Domitiana が分岐していた。

道路発達の一例としてアッピア街道を挙げたが，ローマを発する道路網が南方だけでなくイタリア北部へも四通八達したことはいうまでもない。最初軍事目的で整備された道路はすぐに商業経済活動に利用され，やがて観光，湯治，信仰なども活気づけるようになった。

道路網の整備に伴ってイタリアと属州の間で，また各属州間で人々が絶えず移動できるようになった。イタリア文化の中で最良のものが忽ちのうちに版図僻遠の地まで運ばれ，逆に属州各地からは物資のみならず，すぐれた人材や思想がローマへ，イタリアへともたらされた。

旅行手段——これは古代から現代にかけて著しい変貌を遂げたいくつかの事物の中でも代表的なものであろう。飛行機をはじめ，超高速列車や巨大客船，各種自動車などによって，我々は極めて早くかつ安全に世界中殆どどこへでも旅をすることができる。このように恵まれた今日の時点から回顧した場合，ローマ時代の旅はさして快適ではなかった。この作品に見られる Maec. の一行の旅にしても，有力な政治家たちの旅だから当時としては最高度の便宜を与えられたものであるが，我々が見れば決して贅沢でも楽でもない。その上当時の旅行には現在ではおよそ考えられない特殊な事情がつきまとった。アッピア街道やフラーミニア街道などの幹線道路においてすら強盗，追剝ぎに襲われる危険である。強盗についてスエトーニウスが次のように証言している。[26]「多数の強盗が公然と出没し，自衛のためと称して帯に短剣をさしていた。地方ではこの手の連中が旅人をかどわかし，自由人も奴隷も見さかいなしに，土地所有者の牢獄へぶち込んだ。（中略）アウグストゥスは適切な場所に警備隊を配置して山賊行為を取り締らせた。」

しかしこれでイタリアの道路から危険が去ったわけではない。後になっても追剝ぎは相変らずいたし，道路沿いの住民が旅人を逆に山賊と間違えて番犬をけしかけたり，山中で狼に囲まれるなど，その他にも様々な危険があった[27]。

しかし総じていえば，少なくとも陸上旅行は，鉄道発達以前のいかなる時代よりもローマ時代の方が容易だったようである。中世から近世にかけてのヨーロッパの道路事情の悪さはよく知られている。追剝ぎ，野盗の類がこれに拍車をかけた。ともかく，ローマの道路の一般的状況の良さは中世ヨーロッパの比ではなかった。

たとえばカエサルは 8 日間で 800 マイル（平均して一日に 100 マイル，約 148km.）行進したことが知られているが，このような速度を可能にした道路が，中世，近世のそれのように洪水その他でいつもズタズタに寸断される類のも

25） *Ib.*, p. 150.

26） Suetonius, *Divus Augustus*, XXXII.

27） Chevallier, *op. cit.*, p. 16.

のだったとは考えられない。ネローの死をスペインにいたガルバに報知した使者は，スペインへの道路を通って36時間に332マイル(約491 km，一時間で約 13.6km）の距離を走破したとされる。このような速度は無論例外的なものであるが，普通の旅行者でも平均的には一時間につき5マイル（約 7.4km）の速度で歩けた，との計算がなされている。いうまでもなく，道路の整備，管理維持が体系的になされてなければ，とうてい実現できない速度である[28]。

以上のような道路事情があったため，ローマ人は我々が想像するより以上に旅行を楽しんだようである。それどころか彼らは旅行熱ともいえるほどの活動力を持っていたことが知られている。これはたとえば Hor. 自身の次のテキストからもうかがえる。

Laudabunt alii claram Rhodon aut Mytilenen／aut Epheson bimarisve Corinthi／moenia vel Baccho Thebas vel Apolline Delphos／insignis aut Thessala Tempe；／
sunt quibus unum opus est intactae Palladis urbem／carmine perpetuo celebrare et／undique decerptam fronti praeponere olivam；／
plurimus in Iunonis honorem／aptum dicet equis Argos ditisque Mycenas.

ある人々は風光明媚なロドスやミュティレーネーを，あるいはエペソス，地峡コリントスの城壁を，あるいはバッコスで有名なテーバイ，あるいはアポローンで知られるデルポイを，あるいはテッサリアのテンペーの谷を称えるであろう。またある人々は，汚れなきパラスの都をとぎれることない詩で称え，そして至る所から切り取ったオリーヴの葉を額に飾ることを自分の仕事と心得ている。実に多くの人々がユーノーを称えて馬に適したアルゴスや，富めるミュケーナイを語るだろう

28) G. H. Stevenson, in *Legacy of Rome*, Oxford, 1923, pp. 141-172.

(*Carm.* 1・7・1-9)。

これはプランクスという人物に呈する忠告を内容とする作品の一部である。この人物は政治上の問題で苦境に陥り，一時外国へ逃がれようと考えているが，Hor. は彼に外国へ行く必要はない，イタリアで休息して出番を待てばよいではないかと勧めている。具体的にいうと，それはローマ近郊のティーブル（現 Tivoli）であり，プランクスはここに大きな領地を所有していた。

外国といっても，見たとおりいずれもギリシャ文化圏の島や都市を列挙しており，こういった地方が軍事や観光の上で，もしくはその他の事情で，ローマ人の間で常識的に知られていたことを示す。

ロドス島や，レスボス島の主府ミュティレーネーなどは，帝政期に半ば追放の形でローマを追われた貴族らが好んで滞在した土地である。たとえばアウグストゥスの右腕だったアグリッパは一時期（前23年）左遷されたことがあり，このときミュティレーネーに行っている。また，アウグストゥスの養子として二代目の皇帝となったティベリウスは，ある時期ロドス島に引退していた。ローマから遙かに遠い土地であるが，このような人々にとっては，とり立てていうほどもない旅行だった。

同じ状況をうかがわせる Hor. の文章をもう一つ挙げてみよう。

Quid tibi visa Chios, Bullati, notaque Lesbos?／quid concinna Samos? quid Croesi regia Sardes?／Zmyrna quid et Colophon? maiora minorave fama,／cunctane prae Campo et Tiberino flumine sordent?／an venit in votum Attalicis ex urbis una?／an Lebedum laudas odio maris atque viarum?／scis Lebedus quid sit：Gabiis desertior atque／Fidenis vicus：tamen illic vivere vellem,／oblitusque meorum

obliviscendus et illis／Neptunum procul e terra spectare furentem.

ブッラーティウス君，キオス島やあの有名なレスボス島はどうでした。こぎれいなサモス島やクロイソスの王都サルディス，またズミュルナやコロポーンはどうでした。評判以上であれ以下であれ，どれもこれもカンプス・マルティウスやティベリス川に比べれば見劣りしますか。あるいはアッタロスの町のどれかが君の願いを叶えてくれますか。あるいは船旅にも陸路にもうんざりして，あのレベドスを称えていますか。君はレベドスがどんな所だかよく知っている。ガビイーやフィーデーナエより人の少ない村だ。しかし僕はそこで暮らしてもよい，親しい人々を忘れ，彼らにも忘れられて，陸地から遠く離れて荒れ狂う海を眺めてもよいと思う(*Epist.* 1・11・1–10)。

ここで呼びかけられている Bullatius は，かつて小アジアで Hor. と共に，ブルートゥス (M. Iunius Brutus，カエサル暗殺主謀者の一人）の軍隊に参加していたのではないかと考えられる[29]。

Hor. はここで彼自身かつて訪れた小アジア諸都市および沿岸に浮かぶエーゲ海諸島の名を挙げているものと思われる。あの小アジア時代からおよそ20年の月日が経った今，何らかの要請でブッラーティウスは外地へ旅だとうとしている。これを知った Hor. は，小アジア近辺の古都，観光地へ行くのは止めて，できるだけローマにいるのが上策であると忠告している。これらの地方はまた，Hor. の個人的経歴にかかわりがあるだけでなく，当時のローマ人が旅行の目的地としてよく選んだということも判る。先に引用した作品 (*Carm.* 1・7) に記された一部の土地と地理的に共通していることがその何よりの証拠である。

以上のように，Hor. の二つの文章だけ見ても，ローマ人たちの間には旅行願望がかなり大きかったことがうかがえる。軍人は軍事移動によって，商人ならば商業貿易活動を通じて諸国を知ったが，その知識が世に広まり，ローマ人一般（いうまでもなく貴族や騎士身分で富裕な階層）の旅行熱を盛んにした。またそれを容易に可能にする交通手段，道路状況が既にあった。

Ⅲ 旅の手段

古代人の日常生活について詳細にわたって知りたいという願望は容易に満足させられない。ある特定の事柄をめぐってこれを正確詳細に記述したテキストに出会うことが難しい。この旅日記に関しても我々はどんな方法で Hor. がブルンディシウムまで行ったのか，その交通手段を知りたいとの気持ちを抑えがたい。しかし正に旅に関するこのテキストで，この点がいま一つ明確にならない。

これはさして重要な問題ではないが，しかし約 535.7km（約362マイル）もの長い道程を考えると，おのずからどんな乗物を利用したかとの疑問が生じる。このことについて Palmer, Kiessling-Heinze, Plessis-Lejay, Morris[30] らが言及しているので，諸先学の言葉を参照しつつ，どのような可能性があったか少し考えてみたい。

1 船と四輪車

詩人が乗物として利用したことを明言しているのは，船と四輪の乗物である。前者はフォル

29) 拙稿「ホラーティウスの小アジア追想」，『バルカン・小アジア研究』V，1979年，pp. 1–12 を参照されたい。

30) ここで筆者が利用した注釈書類を一括して記しておきたい．本文，注記いずれにも著者名で示した．
Kiessling-Heinze=A. Kiessling et R. Heinze, *Satiren*, Weidmann, 1968[10]. Morris=E. P. Morris, *Satires and Epistles*, Univ. of Oklahoma Press, 1968 (1939). Palmer=A. Palmer, *Satires*, London, 1964 (1883). Plessis-Lejay=E. Plessis et P. Lejay, *Oeuvres*, Paris, 1921[9]. Porphyrio = *Pomponi Porfyrionis Commentum in Horatium Flaccum*, rec. A. Holder, 1967 (1894). Villeneuve=F. Villeneuve, *Satires*, Paris, 1966[7]. Orelli=G. Orellius (cur. G. Baiterus), Turici, 1851. Fairclough=H. R. Fairclough, *Satires, Epistles and Ars Poetica*, Loeb Cl. L., 1978 (1926).

ム・アッピーからタッラキーナ(=アンクスル)の近くのフェーローニア神苑まで利用できた。

> iamque dies aderat, nil cum procedere lintrem sentimus,
>
> もう間もなく次の日になるという時分，私たちには船の動きが一寸たりとも感じられなかった (20-21)

という文章によって，詩人と相棒ヘーリオドーロスがこの船を利用したことは明白である。前日まだ明るいうちにフォルム・アッピーに着き，そこで夕食をしたため (Hor. は腹痛で食事抜き)，その後乗船し，船は客が寝てる間も進んだが，翌朝船上で目覚めた人々は船が停止しているのに気づく。Hor. もその連れも船上の人であった。さて，もう一つの四輪車は次の文章に述べられている。

> quattuor hinc rapimur viginti et milia raedis.
>
> そこから私たちは四輪の乗物で24マイル運ばれた(86)。

この raedae という語はガリアから入ったもの(つまりケルト語)で，この乗物も，ローマ人がよく利用した他の乗物同様に，ガリアからもたらされた[31]。座席のついた四輪馬車の類である。トリウィークム(詩人が若い女に騙された所)から，詩行では名前の書けない町までの24マイルの道は，四輪の馬車を数台連ねて行けるように整備されていたらしい。ここの注釈で Lejay は「この道は馬車で通れる部分と，騾馬でしか通れない部分とがある」といっているが，一行がこの道で騾馬を利用したかどうかは判らない。

ベネウェントゥムを出てアプーリアの山地へ入り，トリウィークムまで来るときのことを「這い登った」(erepsemus, 79) という動詞で表現し，トリウィークムから次の宿泊地までは四輪の乗物で「運ばれた」(rapimur, 86) としている。Morris はこの動詞の変化に着目し，この二地点で交通手段に変更があった，すなわち騎行 (riding) から車行 (driving) に変ったことを意味するものだろうとしている。

フォルム・アッピーからフェーローニアの神苑までは船が，トリウィークムから名称不明の町までは四輪馬車が利用されたことは確実である。そしてトリウィークムからあとは，各宿泊地間の距離を考えると，全域で四輪馬車が利用されたと考えてよいのではないだろうか。

名称不明の町→カヌシウム=51.8km，カヌシウム→ルビー=34km，ルビー→バーリウム=34km，バーリウム→グナーティア=54.8km，グナーティア→ブルンディシウム =45.9km。

この旅は全体として riding か driving でなされたと考えられる[32]ので，上掲の距離数を一日の行程と見れば，これらは騎行よりも車行にふさわしい数値といえよう。あくまでも推測にすぎないが。

2 馬，騾馬の利用

次に，騎行 (riding) の可能性があるだろうか。ローマでは，馬，騾馬，驢馬がいずれも騎乗用および荷運び用に使われた[33]。馬については Hor. がそのテキストで語っている。

> mutandus locus est et deversoria nota／praeteragendus equus. 'Quo tendis? non mihi Cumas／est iter aut Baias', laeva stomachosus habena／dicet eques;
>
> 私は療養地を変え，なじみの宿より更に遠くへ馬を向けねばならない。「どこへ行くのだ。私はクーマエやバイアエへ行くのではないぞ」と，腹を立てた騎乗者は手綱を左に引きつつ言うだろう (*Epist* 1・15・10-13)。

31) Chevallier は raedae の他にガリアからローマへ入った乗物として benna, carpentum, carrus (ラテン語 currus を駆逐した), petorritum, plaustrum などを挙げている. *Op. cit.*, p. 204.

32) Morris, *op. cit.*, p. 85.

33) Chevallier, *op. cit.*, p. 203.

前 23 年アウグストゥスは大病を患い，今日か明日かという危篤状態に陥るまでになった。これを侍医 Antonius Musa が冷水療法によって持ち直させた。これをきっかけに従来の温水療法に代って冷水療法が流行した。Hor. もこの医者の勧めに従って，いきつけのクーマエやバイアエ[34]といった温泉場を敬遠し，クルーシウムやガビイーの泉水を求めるという次第である。このような湯治場めぐりに馬を利用したことを教えてくれるテキストであるが，黙っているとこの馬は勝手にクーマエ，バイアエ方向へ行こうとするとの記述は，こういう旅ではいつも馬を利用したことを暗示する。

次に騾馬の利用については *Sat.* 1・6 に以下のような文章がある。

> nunc mihi curto／ire licet mulo vel si libet usque Tarentum,／mantica cui lumbos onere ulceret atque eques armos;
>
> 今なら私は尾を切った騾馬に乗り，思い立ったらタレントゥムまでだって行けます。旅行鞄の重みが騾馬の背を，またその脇腹を乗り手が痛めつけることでしょう(104–106)。

Hor. が実際にこのような旅をしたかどうか判らない。ローマからタレントゥムまではかなりの距離であるが，しかし *Sat.* 1・5 から推して上掲文中の旅の方法が可能なものだったことは確実である。馬車の通る道なら，原則として騾馬や馬に乗っても通れるわけである[35]。このテキストは，公人と私人の違いは旅行方法にも表われると述べたもので，高級官僚は定めによって，四輪馬車に乗らねばならないが，私人たる Hor. は騾馬に乗って気ままに一人旅が楽しめるとしている。

というわけで，このブルンディシウムの旅でも所によっては馬や騾馬を用いたことが考えられる。騾馬 (mulus) という語が次の一文に見られる。

> hinc muli Capuae clitellas tempore ponunt;
>
> そこ〔カンパーヌス橋の小山荘〕からカプアへ向かい，ここで騾馬の荷鞍はちょうど良い頃合に下された(47)。

これは Plessis-Lejay がいうように騾馬に乗って来たことを意味するのだろうか。あるいは Palmer が推測するように，騾馬の引く四輪車で運ばれたということであろうか[36]。

この騾馬は，前の宿泊地カンパーヌス橋の接待役人たち (parochi) が役目上提供したものに間違いない。これがどの用途のものだったのか，上の二つの推測を含めて明確でない。もう一つ推測を加えることができる。これは荷物専用の騾馬だったのではないか。背の左右に荷を振り分けて運ぶ動物の姿を彷彿させる一文である。表現を文字通りに考えれば，むしろこの第三の推測の方が可能性は大きい。なお Plessis-Lejay は，ここ（カプア）では騾馬を休息させただけだというが，これは後続の二行（「マエケーナースは遊びに行き，私とウェルギリウスは眠った。眼病みと消化不良の人間にとって球戯はよくないので」，48–49）から考えて，ありえないと筆者は確信する。いずれにしろこの旅でも騾馬が重宝されたことは確かである。他方，騎乗用の馬はこの詩では言及されてない。

3 徒　歩

ローマ人は徒歩旅行もよく行なった[37]。このブルンディシウム行ではどうだったろうか。Kiessling-Heinze や Plessis-Lejay はローマ人の徒歩旅行そのものをなかったことと明言している。後者は Hor. のこの作品に準拠して，「陸

34) Cumae, Baiae はいずれもナポリ近郊の海浜保養地.

35) ローマ時代の舗石道路は動物の蹄を痛めやすいので，車行，騎行のいずれにも余り適していなかった．人々は蹄を保護するために鉄製のヒッポサンダル（馬の沓）というものを穿かせ，道路両端の砂地部分を歩かせた．Chevallier, *op. cit.*, p. 203. 加茂儀一『騎行・車行の歴史』，法政大学出版局，1980 年，75–76 頁.

36) Palmer は，筆者が「荷鞍」と訳した clitellas を，騾馬の引く車 raedae の乗客らを比喩的に指している可能性もあるとして，このように推測している.

37) Chevallier, *op. cit.*, p. 14 et 203.

路の旅は車でなされ(86行), あるいは騾馬でなされた(47行)。古代人は徒歩旅行はしなかった。小カトーの事例[38]は例外として引用されるものである」としている。

Kiessling-Heinze の考えも同様で, 1900年前(今では2千年前)のローマ人が歩いて旅したことはありえず, これは北欧の学者たちのでっち上げだと決めつけている。そして,「小カトーについて, 彼が身心を鍛えるために徒歩旅行したということは全くの例外として述べられるにすぎない。Hor. とその道連れは乗物で運ばれたのであり, 最悪の場合でも馬に乗った」としている。

筆者の知る限り, この作品に関して徒歩旅行の可能性を云々するのは Morris だけである。それも, 確かではないがとの制限付きで[39]。前二者の発言と併せ考えると, 徒歩の旅の可能性は考えなくてもよいかも知れない。この点で問題になりうるのは次の一文であろう。

> sed panis longe pulcherrimus, ultra／callidus ut soleat umeris portare viator:
>
> その反面パンは極上で, 抜け目ない旅行者はいつもこれを肩に担いで旅を続けるほどだ(89-90)。

上質のパンを運ぶ有様は, 一般の旅行者たちによく見られることとして述べているのであって, Maec. や Hor. の一行がそうしたのだと特定しているわけではない。また荷物運搬は奴隷の仕事と相場は決っていたから, これは歩いてついて行く奴隷たちがパンを担ぐという意味である。従って Hor. や Maec. らが歩行していたということにはならない。

最後に残るのは, この旅の最初の行程, すなわちローマからアリーキア, アリーキアからフォルム・アッピーまでの二区間の交通手段である。徒歩ではないとするならば馬や騾馬に乗るか, あるいは馬車や轎の類を利用したことになる。

Hor. とヘーリオドーロスはローマを発って先ずアリーキアで一泊し, 翌日フォルム・アッピーに到着した。その間どの手段によったか一言も記していない。5行目で「私たちより身軽な人々」と訳したラテン語は altius ac nos/praecinctis (5-6) である。字義どおりに訳すと「トゥニカを我々よりもっと高い位置までたくし上げている人々」になる。なぜ衣服をたくし上げるのか。勿論歩行をよりたやすくするためである。ということは, この表現から推測する限り, Hor. とヘーリオドーロスの二人も歩いたのではないかとも考えられる。しかしそうではないらしい。

この表現は, 訳文に示したように, 要するに旅を急ぐ人々, 旅の仕方の早い人々の意である。Kiessling-Heinze, Morris らが指摘するように, この表現は精力的に先を急ぐ人々という意味で比喩的に用いられており, この行程を二人が歩いたということの証にはならない。また, この praecinctis を, 必ずしも轎を担ぐ奴隷たちのこととする (Palmer) 必要はないであろう。

Morris は徒歩行を否定するだけで, 代りに何を利用したかという提言はない。Palmer は轎 (litters) を使ったかも知れないとする。彼自身いうように, これという決め手はない。動物の背で揺られたか, 轎で担がれたか, あるいは馬車か, そのいずれかである。

交通手段については以上である。今日では列車を利用すればローマからブルンディシウムまでは一昼夜で済む旅である。自動車を利用すれば更に快適な旅となるかも知れない。二千年前は, スピードは恐らく馬車が最も早かったであろう。Hor. らも馬車を最も多く利用したはずである。

---

38) これはプルータルコスが伝えている.「彼(小カトー)は激しい鍛練で身体を造り, 頭に何もかぶらずに炎熱や雪に耐えること, 乗物を利用せずに四季を通じて徒歩旅行することに習熟した」(*Cato*, V).

39) 'The Journey was made partly on foot (though this is not certain), partly in a canal boat...' (p. 85).

Ⅳ ルーキーリウスの模倣作か

批評家，注釈者の多くは，この作品はルーキーリウス（以下 Luc. と略記）の類似作品を模倣したものであると確言してきた。その代表的な発言を二例，これとは若干の相異点を持つ批評の例を一つ次にかかげる。

Porphyrio：「Hor. はローマからブルンディシウムまでの自分の旅を記しつつ，この諷刺詩によって Luc. に対抗しようとしている。Luc. はその第三巻で先ずローマからカプアまでの，次でそこからシキリア海峡まで〔の旅〕を記していた。」

Perret：「Hor. がブルンディシウム旅日記を書く以前に，Luc. はたまたま諷刺詩集第三巻でローマからシキリアまでの旅を記述していた。この Luc. の話が，類似のエピソードを詩に綴ろうとの考えを Hor. に与えたのは誠に自然である。しかし本当に意表を衝くのは，Hor. の旅の最も特殊な逸話が既に Luc. の旅行記にあったことである[40]。」

Coffey：「この諷刺詩もまたある程度までは Luc. のシキリア旅行記の模倣である。Hor. の全体的アウトラインがよく似ており，いくつかの類似点は見逃がしようもない。たとえば泥道とか，ある種の争いなど。しかし Hor. が，文学的モデルと彼の実体験談とをどの程度に混ぜ合わせたかということは，未解決の問題とすべきであろう[41]。」

古注家 Porphyrio の発言は Orelli も言及しており，Hor. が Luc. を真似たとの批評を助長する要因となったようである。この模倣説を肯定するのは Palmer, Morris, Villeneuve, Plessis-Lejay, Sellar[42], Perret, Wili[43], Grimal[44], Fairclough らである。Kiessling-Heinze は Luc. の作品を挙げてはいるがこの imitation の問題には拘泥しない。Anderson[45] は，表現の簡潔さ（brevitas）に関して Luc. と Hor. を比較する過程で Porphyrio の言葉を引用し，問題の二つの旅行記の関連を論じているが，古注家の言葉についてはとかくの論評は見られず，その模倣対抗説を認めているようである。そして「Hor. はこのテーマ（旅行記）の詩的価値を認めていた」として特にテーマの借用を強調する。しかし Coffey になると，上で見たとおり，この模倣を「ある程度までのもの」と制限を設け，安易にモデルを決めてしまう従来の評者らの発言にブレーキをかけようとしている。Fraenkel も Luc. の作品とのかかわり合いを否定しないが，しかし安易な模倣説を捨てている[46]。

Hor. は単純に Luc. を模倣したのだとの固定的な見方に対し疑問を投げかけ，基本点から出発して二作品の関係を論じ，新しい可能性を提示したのは Rudd である[47]。

結論を先にいえば，Hor. が Luc. の旅行記を模倣したかどうか不明である。模倣したと積極的に主張させる証拠はない。少なくとも，Luc. を模倣する目的でこの作品を書いたとは考えられない。

いくつかのエピソードが二作品に共通していると指摘されてきた。中でも従来諸家が Hor. による Luc. 模倣の典型として扱ったのが，宿の若い女中に詩人が一杯食わされる話である。

hic ego mendacem stultissimus usque
puellam／ad mediam noctem exspecto:
somnus tamen aufert／intentum Veneri:
tum inmundo somnia visu／nocturnam
vestem maculant ventremque supinum.

40) J. Perret, *Horace*, Hatier, 1959 pp. 69-70.
41) M. Coffey, *Roman Satire*, Methuen and Co. Ltd., 1976, p. 74.
42) W. Y. Sellar, *The Roman Poets of the Augustan Age*, New York, 1965 (1892), p. 55.
43) W. Wili, *Horaz und die augusteische Kultur*, Basel/Stuttgart, 1947, pp. 94-95.
44) P. Grimal, *Horace*, Editions du Seuil, 1958, pp. 37-38.
45) W. S. Anderson, 'The Roman Socrates : Horace and his Satires' in *Critical Essays on Roman Literature* (*Satire*), ed. by J. P. Sullivan, London, 1963, pp. 7-9 (=Anderson, *Essays on Roman Satire*, Princeton, 1982, p. 19).
46) E. Fraenkel, *Horace*, Oxford, 1957, p. 112.
47) N. Rudd, *The Satires of Horace*, Cambridge U. P., 1966, pp. 54-64,

ばかな話だがここで私は嘘つきの若い娘を真夜中まで待ったものだ。だが睡魔が欲望(ウェヌス)に誘われて脹らんだ私を奪い去った。そして悩ましい夢のあれこれが，仰向けに寝た私の夜着とからだを汚してしまった(82-86)。

Luc. の断片の中にこれと同じ状況を示すものと解釈されてきた一文がある。Warmington の集めた古期ラテン語文集によれば次のとおりである[48]。

perminxi lectum, imposui pedem pellibus labes.

私はベッドをすっかり濡らし，からだを汚してしまった。

この文章が一般に上掲した Hor. の文章の手本だったと見なされた。更にこの Luc. の文章は諷刺詩集第三巻中の *Iter Siculum*「シキリア紀行」の一断片と見なされた。かくして，Hor. はその「ブルンディシウム旅日記」を全体として Luc. の作品を模倣して書いた，と見なされるようになったのである。

ところが，Rudd が指摘しているが，この Luc. の文章を *Iter Siculum* の一部とする確たる根拠はない。Luc. の断片を集めた Warmington もこれを「所属不明の断片[49]」の一つとして扱っている。ここで Warmington は，Luc. が飲みすぎの例を出しているという解釈も可能だと記している[50]。

というわけで，たとえば顕著な例を挙げると，Perret の主張は無根拠の可能性がある。Perret は，男女の交わりに関する二つの逸話が Luc. と Hor. のどちらの旅行記にもあるが，これは Hor. が先輩の anecdotes を真似たからである

48) *Remains of Old Latin* III (Lucilius, Laws of the XII Tables), tr. by E. H. Warmington, Loeb Cl, L., 1967 (1938), frg. 1183.
49) *Op. cit.*, pp. 366-417.
50) これは Marx の意見を考慮したもの. *Op. cit.*, p. 387, n. a.

と考えている。彼は，諷刺詩に関して Hor. が Luc. を模倣する意欲，自分の作品および人格そのものまでも，かつて Luc. が創出した鋳型に流し込んで作る意欲を持っていたと主張している。Hor. の独自性などまるで眼中にない論法であるが，この主張を裏付けるものとして Perret は Luc. の「シキリア紀行」とこの「ブルンディシウム旅日記」との類似点を挙げ，Hor. が模倣したというのである[51]。

しかしその論拠の一つである Luc. の断片の一つは上に述べたように「シキリア紀行」の一部ではない可能性が大きい。Perret が念頭に置いたセックスにまつわるもう一つの文例[52]にしても，Rudd によれば性的な文脈から外れて，むしろ食事ができない人間の焦り，苛立ちを表現した Hor. の文章との関連の方が大きい。次にその Luc. の文章を挙げよう。

Tantalus qui poenas, ob facta nefantia, poenas pendit.

言葉に出せぬことをしてのけたために罰を，さよう，罰をこうむるタンタロス。

Perret はこの文章が，トリウィークム近くの山荘で若い娘を深更まで待っているときの詩人の苛立ち——タンタロスはゼウスに反抗したため冥府に送られ，そこで目の前の水を飲めず，リンゴを取って食べもならず，永遠の飢渇に苛苛させられるという劫罰をこうむった——を表わす文章のモデルであるという。ところが，同じ Hor. の文章でも，もっとこれに似つかわしい別の部分がこの旅日記にはある[53]。

hic ego propter aquam, quod erat deterrima, ventri／indico bellum, cenantis haud animo aequo／exspectans comites.

ここで私は水——これは最悪だった——の

51) *Op. cit.*, pp. 69-70.
52) Warmington はこれを Luc. の *Sat.* III, 136-7 としている (pp. 44-45).
53) Rudd, *op. cit.*, p. 55.

せいで腹に宣戦布告し，心おだやかならぬままに仲間が食事するのを待たねばならなかった(7-9)。

見たとおり，Luc. 断片タンタロスのくだりは，男女の交わりに関する話題とするよりも，飲食にまつわる話題とする方がより説得的である。タンタロスは飲めず食えずの罰をこうむり，詩人の方は腹をこわして同じく飲食ができない。

とはいえ我々は Perret（およびその他の人人）の考えを全面的に否定することはできない。筆者が Rudd の解釈を強調して言及したのは，帰属不明の断片を手掛りにして二作家の関係を論じるのは適切でないとの彼の考えに筆者も同意するからである。既定の事実とされる事柄には時たま思いがけない陥穽がある。この場合も我々は，Hor. が Luc. の旅行記を真似たのだ，との常識的事実を疑わねばならないだろう。かといって，Luc. がその諷刺詩集第三巻中に旅行記を書いたことは事実であって，この事実と Hor. の *Sat.* 1・5 が無関係だったといい切ることはできない。Porphyrio のいう対抗心説はさておいて，Hor. が Luc. のシキリア旅行記を読んで面白いと思い，みずから旅をした後にこの読書経験を想起し，自分も同様のテーマで同じジャンルの詩を書いてみよう，と思いついたことは十分に可能である。これは一篇の詩作品の着想の一致ということであって，細部にわたる模倣を意味しない。かくして Luc. の作品を直接下敷きにして Hor. がこの作品を綴ったという考えは排除されるであろう。それでは詩人はなぜこの作品を書いたのであろうか。先輩を模倣するためでもない，対抗心ゆえでもないとするならば，その制作意図はどのあたりにあったのか。

V　制作の意図

旅日記の内容などは誰の作品であってもおよそ似たようなものになる。Hor. も，腹痛で食事が摂れないこと，宿場町の賑わい，眼病，親しい人々と同行したり再会したりの楽しさ，宿での余興，旅の不便さ，土地の古い伝説，失敗に終ったアヴァンチュールなどを書き綴っており，こうして改めて羅列すれば誠に平凡なこと，誰の旅行記を繙いても出てきそうなことばかりである。特に Luc. とはいくつかのエピソードが重複するように見えるため，Hor. の述べる全エピソードは実体験に基づくのではなく，Luc. を真似るための文学的な創作であるとの考えも示された[54]。しかし筆者の知る限り今日の学界でこの創作説を口にする研究者はいない。これはあくまでも 37 年春に実際になされた旅の有様をまとめたものである。

筆者は制作の動機ということを考えてみたが，これを単純に一つに絞るのは無理である。少なくとも二つの事実を考慮に入れねばなるまい。一つは 37 年春 Maec. に誘われて旅行し，一篇の詩に綴るに値すると思える体験をしたこと。いま一つは先輩 Luc. の作品を知っていたので，自分も諷刺詩のジャンルで同様な旅の体験を記してみたいと考えたことである。この間の状況は Fraenkel が次のように推測している[55]。

「37 年春の個人的体験がなければ Hor. はこれを書かなかっただろう。しかしまた，当時彼は Luc. の諷刺詩をもっと洗練された形で継続する肚を固めていたので，*Iter Siculum*「シキリア紀行」により刺激，鼓舞されるところがなかったら，この場合もまたこの作品は誕生しなかったであろう。*Iter Siculum* という作品は，こういう旅の記述が一篇の satura にふさわしいテーマたりうることを Hor. およびその読者に証したのである。」

Fraenkel がここでわざわざ satura といっていることについては補足の要がある。これは夙に Sellar が次のように語っている[56]。「この作品（*Sat.* 1・5）は，satura という語が二次的に獲得した検閲的意味に先行する，この語本来の意味によりよく対応している。（中略）途中で出会った何人かの人々に向けられた二，

54) H. J. Musurillo が提唱した. Cf. Rudd, *op. cit.*, pp. 54 ff. Anderson, *op. cit.*, p. 20.
55) *Op. cit.* p. 107.
56) *Op. cit.*, pp. 55-56.

三のピリッとした言葉を除いて，ここには純粋に諷刺的なものはなく，まして倫理的なものは皆無である。(中略) Hor. の諷刺詩集全体の中でこれは最も明確に，エンニウス (Ennius) から Luc. へ伝えられたあの古期の satura の性格を持っている。」Sellar がかくいう satura とは，一つの作品の中に何でもかでもごた混ぜにして記述する作品の謂である。

Sellar もいったように，この旅日記の中で誰が非難攻撃されているかを考えると，これが他の作品とはかなり異質であることが判る。「あいつをやっつけてやる」との意図で俎上にのぼせられる人物は一人もいない。満艦飾のバッジを誇るフンディーの町長，サルメントゥスとキキッルスの両人，嘘つき娘などが語られはするものの，詩人は特に悪意を込めて語っているわけではなく，正に話の種にという感覚で冷かしているにすぎない。

いかにも諷刺詩らしい非難される人物はいないのであるが，それではその逆に詩人によってほめ称えられる人物はいないものか。作品を一読すればこのような人物の存在は明白で，このあたりが詩人の狙いだったようである。その記述は時間的に三段階に分かれる。

先ず冒頭部で Hor. はギリシャ人の弁論家をさりげなく紹介する。

> rhetor comes Heliodorus, Graecorum longe doctissimus
>
> 道連れは弁論術教師ヘーリオドーロスで，これはギリシャ人の中でも図抜けた学者である (2-3)。

最上級 doctissimus を副詞 longe で更に強調しているが，これは文字どおりに解釈すべきもので，最上級にありがちな揶揄の響きはない。この弁論家がどういう人物だったのか判っていない[57]。恐らく Maec. の文芸サロンに出入りする重要なメンバーの一人だったのであろう。同じサロンに仲間入りを許されて間もない Hor. も顔なじみになっていて，こうして共に旅をする機会を得たものと思われる。この表現には善意以外の何もない。

次に詩人が語るのは Maec. である。ヘーリオドーロスと詩人はタッラキーナ (アンクスル) へ来たが，ここは二人が Maec. らと合流する予定の地であった。

> huc venturus erat Maecenas optimus atque Cocceius, …
>
> この地へあの素晴しいマエケーナースとコッケーイウスが来る手筈になっていた(27-28)。

「素晴しい」と平凡な訳語になったのは optimus で，これは bonus「よい」の最上級である。最上級の使用は時として反意にもなるが，ここでは明らかに Fraenkel もいうように情愛の籠もった表現である[58]。こうして第二段階で Maec. が好意をもって語られたが，第三段階ではこの好意が遠慮なしに昂進し，爆発的な表現を得ている。シヌエッサでプローティウス，ウァリウス，ウェルギリウスらと再会を果たしたときのことである。

> animae qualis neque candidiores／terra tulit, neque quis me sit devinctior alter. ／o qui complexus et gaudia quanta fuerunt!／nil ego contulerim iucundo sanus amico.
>
> 彼らはかつてこの世になかった程の純白の魂の持主で，また私以上に彼らを大事に思う人間もいるまい。私たちは抱き合って再会を祝したが，その嬉しかったこと！ 正常である限り，私は，友情の楽しさに比べられるものなど思い付かないだろう(41-44)。

Maec. についてはやや控え目に optimus の一語で自分の気持を示したが，ここでは，友人た

57) J. Caesar が若い Octavianus の教師に取りたてた Apollodorus の変名ではないかとの推測もある. Fairclough, *op. cit.*, p. 63.

58) *Op. cit.*, p. 111.

ちと再会したあの瞬間の感情を忠実に反芻しつつ，その感情を読者——Hor. の念頭にある読者は実はこの友人たちに他ならない——に伝えるべく言葉が噴出している。Fraenkel は，Maec. に関する言及との対比で，この部分の昂まりを「強烈なクレッシェンド」といっている[59]。この部分に関するこの碩学の発言に我々はひたすら傾聴するのみである。いわく，「感激して昂まった気分をそのまま述べているが，この表現の価値を評価するには，我々は Hor. が最上級をやたらに使う人ではなかったことを想起すべきだ。この部分の最後の文（nil ego contulerim iucundo sanus amico）を，nil me paeniteat sanus patris huius「正気でいる限り私はこの父を不満とすることはありません」（*Sat.* 1・6・89）と比べるとき，我々は詩人の心からの声を聞いていることが判る。つまり彼は，自分の父親を想い出して称えると同様にこの人々との友情を称えている[60]。」

かくして，この作品中で詩人の積極的な発言として最も有意義なのは，上の三部分の中の特に後二者であると考えられる。それゆえ，ごくありきたりな旅のあれこれを綴る途中でこのような発言を挿入することは，最初から詩人の計算にあったのである。自分を文学サークルに仲間入りさせてくれた Maec. に率直に喜こんでもらうこと，文学仲間たちに対しては普段から心にあるままの賛辞を浴びせて称えること，これこそ強いていうならばこの作品の目的だったのであろう。Luc. の詩風の継承は副次的なものである。こうして，「ブルンディシウム紀行は Maec. のサロン内での Hor. の位置を反映すると同時にこれを強めもした[61]」のである。

VI 結　び

詩人 Hor. は同時に常識人であり，市井人としての義理を欠くことはなかった。機会があれば作品の中で Maec. や友人たちに謝意を表したいと日頃考えていたことは容易に察せられる。そして 37 年春の旅行は正にその好機を提供したことになる。

シヌエッサでの大袈裟にも思われる喜びは，感謝の念の籠もった友情の最高度の表現と評価してよいであろう。因みに Zielinsky は，Tibullus[62] と Hor. の間の友情にふれたあとこれを二級の友情と断じ，シヌエッサで再会した人々との友情こそ Hor. にとって第一級のものだったと評価している[63]。

また，このように大きな意味を持つ友情が単に詩人の感性の所産であるだけでなく，当時若い詩人が信奉していたエピクーロス哲学の教えに沿ったものであることは Wili が指摘している[64]。シヌエッサで合流した友人たちはナポリから来た。ナポリに近いヘルクラーネウム[65]には当時の代表的なエピクーロス派哲学者ピロデーモス（Philodemus）がいた。この若い詩人たちのグループは彼の影響を受けており，Hor. もその一員だったから[66]，初期の作品にエピクーロス的なものがあっても不思議ではない。Wili は特に 44 行の sanus「健全な」という語をこの学派の特徴を示すものと見ている。

以上のように，公，私という社会的立場から見ると，この作品の内容は全く私的なものである。友情を称えることが意図されていたとすれば，これは当然の帰結である。この旅は Maec. をはじめコッケーイウス，フォンテーイウス・カピトーらが同道した。この三人はいずれも錚錚たる政治家である。政治を語るのに，またと

59) *Ib.*, p. 112.
60) *Ib.*, p. 112.
61) Rudd, *op. cit.*, p.61.

62) Albius Tibullus (ca. 60-19). Messalla Corvinus の文芸サロンの中心になった詩人．『エレギアエ』という詩集二巻を残した．サロンは異なるが Hor. とは親交があった．
63) T. Zielinsky, *Horace et la société romaine du temps d'Auguste*, Les Belles Lettres, 1938, pp. 16-17.
64) *Op. cit.*, pp. 33-34. 若い頃のエピクーロス信奉については，Zielinsky, *op. cit.*, pp. 65-68.
65) Herculaneum. カンパーニアのナポリ湾に臨む町で，79 年ウェスウィウス山の噴火でポンペイと共に灰に埋もれた．
66) Wili, *op. cit.*, p. 31. L. P. Wilkinson, *Horace and his Lyric Poetry*, Cambridge U. P., 1968², p. 14 et n. 2. H. Hommel, *Horaz, Der Mensch und das Werk*, Heidelberg, 1950, pp. 42-44.

ない機会である。しかし Hor. にその気配はまるでない。Weinreich が指摘するように[67]，Hor. は高度な政治を語る機会がある場合，できるだけ簡単に済ませた。詩人が，オクターウィアーヌス（後のアウグストゥス）とアントーニウスの和解を目ざす外交官らのお伴をしていることは僅かな言葉で暗示されるだけである。オクターウィアーヌスの全権大使 Maec. とコッケーイウスは「重大な要件で派遣された使節」で，「仲違いした友人たちを取りなすことに長じ」ており，相手方には「アントーニウスの腹心の友」たるフォンテーイウスがいる。政治的なものを匂わせるのは以上ですべてである。

この政治臭のなさは Campbell も指摘して「Hor. は読者の予想を裏切って全くつまらないことしか述べていない」といっている[68]。彼はこの作品の執筆目的を，Maec. との親交が心安い，自由な，全く非政治的な性質のものであることを示すことだったとして，ここに作品全体の非政治性の原因があると見ている。この指摘は正当であるが，執筆目的としては詩人仲間たちとの友情を表現することも挙げなくては片手落ちであろう。

前43年秋マケドニアのピリッピーで共和派（ブルートゥス，カッシウス）とカエサル派（アントーニウス，オクターウィアーヌス）との決戦がなされた。図式的にいえば，この戦場で Maec. と詩人 Hor. とは敵味方に分かれて陣営を異にしていた。勝利を収めたのは Maec. の属するカエサル派であったが，この両名が連れだってブルンディシウムへ旅した37年春といえば，この戦争から僅かに5年半の歳月を数えるにすぎない。この決戦はまだ人々の記憶に生々しい。37年当時も政治情勢は不安定である。ブルートゥス軍に参加してピリッピーの戦場で敗戦の惨を身をもって経験した Hor. は，政治的に自分がどのような立場にあるのか，またどのように振舞うべきか，よく承知していた。政治に立入ってはならず，更に寡黙でなくてはならない。ローマ市民の中には，Hor. が政治的な行動に出たり，何か落度でもあれば，すぐ後指をさす人々がいくらもいたのである。当時の詩人はまだこの不安を引きずっていた。

しかし政治の世界を捨てると同時に彼は文学の志を分かち合う友人たちに恵まれた。それがウェルギリウスやウァリウスらで，彼らは親交を続け切磋琢磨するうちに互いに詩才を認め合う。ここに，文学に転じた Hor. にとって希望の灯がともり，展望が開けた。それだけではない。やがてこの友人たちは彼を政治家 Maec. に紹介した。当時の文学者にとって有力な政治家の後援を受けることは，文学界での定着および日常生活の安定という二重の意味を持っていた。この旅行は詩人と政治家の親交のごく初期の頃のものである。詩人の側からすれば，Maec. に招かれて旅に同行することは義務的な行動などではなく，逆にとてつもない楽しみであり喜びであった筈である。詩人の希望に違わずこの旅は彼の文学者としての生き方を決定づける重要な出来事となった。

「ブルンディシウム旅日記」はかくして，政治的には不安を背負いながらも，他方では文学者として希望を抱いて出発したばかりの Hor. の状況を映す鏡のような作品と評することができる。

67) O. Weinreich, *Römische Satiren*, Artemis, 1962², Einleitung L.

68) A. Y. Campbell, *Horace, a New Interpretation*, Greenwood Press, 1970 (1924), pp. 166-167. これは多少の差はあれ大低の研究者が指摘している.